

自己評価報告書

平成23年5月25日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520297

研究課題名（和文） ロシア・ルネサンス期の思想における生の哲学

研究課題名（英文） Lebensphilosophie in the Thought of Russian Silver Age

研究代表者

北見 諭 (KITAMI SATOSHI)

公立大学法人 神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00298118

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学

キーワード：ロシア思想、哲学、ロシア文学

1. 研究計画の概要

本研究は、その重要性が広く認識されているが、いまだ十分に研究のなされていない、いわゆる「ロシア・ルネサンス」期の思想を、「生の哲学」という観点から問題史的に検討しようとするものである。ニーチェ、ベルクソン、プラグマティズムといった生の哲学に分類される西欧哲学を、ヴァチエスラフ・イワーノフ、ロースキー、ブルガーコフ、ベルジャーエフといった、ロシアのルネサンス期の思想家がどのように受容したのか、その過程を明らかにする。

これまでの三年間でイワーノフ、ロースキー、ブルガーコフの研究を行った。残りの二年間で、ブルガーコフ研究の成果を公表するとともに、ベルジャーエフの研究およびその成果の報告を行い、時間に余裕があれば、ブルガーコフの経済哲学を本研究の観点から検討の対象にし、ブルガーコフ研究をさらに深めることにしたい。

2. 研究の進捗状況

本研究が当初研究対象として取り上げることを予定していたのは、ヴァチエスラフ・イワーノフによるニーチェ受容、ロースキーによるベルクソン受容、そしてベルジャーエフとエルンによるプラグマティズム受容である。このうちイワーノフとロースキーに関してはすでに研究を終えており、両者にはっきりとした共通の特徴があることも明らかにしている。その共通性というのは、彼らがいずれも、人間的な意識や理性に先立つ根源的な事実としての実在を明らかにしようとする西欧の生の哲学を高く評価する一方で、

生の哲学がその実在を形式や秩序を持たないカオスと見なしていることを批判しているというところにある。また彼らがその批判とともに生の哲学から離れ、人間の意識に先立つ実在を超越的な秩序を備えたコスモスとみなすような独自の思想を構築していることもその共通の特徴である。

研究の三年目には、こうした共通性がさらにベルジャーエフやエルンにも見られるのかを検討する予定だったが、ある研究グループからの依頼があり、セルゲイ・ブルガーコフの言語哲学を検討することになった。ブルガーコフは本研究の主題であるロシア・ルネサンスを代表する思想家であり、当初から研究対象に含めることを検討していたが、生の哲学との関係が希薄であるように思えたため、当初は研究対象に含めなかった。しかし、本研究の観点から研究を進めることで、彼の言語哲学にもイワーノフやロースキーとまったく同じ問題が見られることが分かった。それに、若いころマルクス主義者であり、後にその批判に転じたブルガーコフの場合、イデオロギー的上部構造（意識）を規定するものとして経済的下部構造を捉えようとするマルクス主義が、意識や理性以前の実在を捉えようとする生の哲学と同様のものとして捉えられていたのではないかと分かってきた。

本研究によって現在までで明らかにしたのは、以上のようなことである。

3. 現在までの達成度

評価「おおむね順調に進んでいる」

理由：研究計画と実績のずれは、当初予定し

ていなかったブルガーコフ研究が入ってきたことである。そのためベルジャーエフとエルンの研究が遅れ、もしかしたらエルンは期間内には扱えなくなったかもしれない。しかし、ルネサンス思想においてブルガーコフが持つ重要性はエルンとは比べ物にならず、そのブルガーコフの思想にも一連の思想家と同じ問題が見出せることを発見したことは本研究にとってきわめて意義のあることであった。残りの二年間にベルジャーエフのプラグマティズム受容を研究し、さらにはブルガーコフとマルクス主義の関係を本研究の観点から扱うことができれば、当初予定していた以上の成果が得られたと考えてよい。もっとも期間内にブルガーコフとマルクス主義の関係まで扱えるかどうかは今のところ不明であるが、扱えなかったとしても、ベルジャーエフ研究が予定通りに進めば、ほぼ計画通りに研究が遂行されたと判断してよいと思われる。

4. 今後の研究の推進方策

残りの二年間については、以下のような計画で研究を進めていくことにしたい。

(1) 今年度前半でブルガーコフの言語哲学に関する研究成果を論文の形にまとめる。

(2) 今年度後半からベルジャーエフによるプラグマティズム受容の本格的な研究を開始する。

(3) できればベルジャーエフ研究と並行して、難しければそれが終了した後に、ブルガーコフとマルクス主義との関係の問題、そして彼の『経済哲学』について検討を行う。したがって、当初の研究計画で予定していたエルンのプラグマティズム受容はひとまず研究計画から外すことになり、かわりにブルガーコフの言語哲学の研究、及び、可能であれば、ブルガーコフの経済哲学の研究が入ることになる。以上が研究計画の変更である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 北見諭「ロースキーの直観主義とベルクソン哲学」『スラヴ研究』56号、37-62ページ、2009年、査読有

[学会発表] (計3件)

- ① 北見諭「ロースキーの直観主義とベルクソン哲学」、「プラトンとロシア」研究会、2009年3月14日、北海道大学
- ② 北見諭「セルゲイ・ブルガーコフの『名の哲学』について」、ロシア思想史学会例会、2010年12月25日、早稲田大学

- ③ 北見諭「ブルガーコフの『名の哲学』におけるプラトン主義」、「近代ロシア・プラトニズムの総合的研究」研究会、2011年3月1日、北海道大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]